

## チャールズ・ディケンズ

### 『主イエスの生涯』に表れたキリスト教観

永岡 規伊子

19世紀イギリス・ヴィクトリア朝の時代に生きたチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)は、長編小説15編、中編の小説や旅行記8編、自ら編集する雑誌をはじめとして様々なジャーナルに寄稿したエッセイ・物語が約300、劇作16、スピーチ約100回、自作の小説の公開朗読約500回、と生涯に亘って大衆と共にあり、大衆に向けてメッセージを送り続けた作家であった。その中で、『主イエスの生涯(*The Life of Our Lord*: 1846年)』だけが自分の子どもたちに読み聞かせるために書いた私的なものとして、公刊はもとより、家庭用に印刷することさえも固く禁じるという異色の扱いがなされたものであった。<sup>1</sup>この手書き原稿を託された義理の妹ジョージナ・ホガース(Georgina Hogarth)がディケンズ自身の子どもと、ディケンズの親友で『パンチ(Punch)』の編集長であったマーク・レモン(Mark Lemon)の子どもに書き写した以外は、当時の人々の目に触れることはなかった。

家族はその遺志を受け継ぎ、最後に生き残った第六男ヘンリー・フィールドディング・ディケンズ(Sir Henry Fielding Dickens)が、自分の死後、家族の大多数が賛成するなら出版してもよいという遺言を残したため、1934年になってその草稿は初めて出版された。執筆後88年、ディケンズの死後64年が経っていた。

同じように自分の子どもたちのために 1851 年から 1853 年にかけて書かれた『子どものための英国史(*A Child's History of England*)』が出版されていることを考えれば、なぜこの作品だけを家庭内に留めておこうとしたのだろうか。その理由に深い意味合いがあると考えざるを得ない。

筆者はディケンズ文学の原点として『主イエスの生涯』が位置づけられると考えるが、それについては別に述べることとして、本稿では、まず『主イエスの生涯』の構成と内容を検討する。その上で、この作品の特徴から浮かびあがってくるディケンズのキリスト教観を考察したい。

## I. 『主イエスの生涯』の構成と内容

### 1. 章の成り立ちと内容

『主イエスの生涯』はイエスの誕生から死と復活までを、新約聖書の四福音書に書かれた記事から取捨選択して編集し、最後に「使徒言行録」に記された使徒たちの宣教とキリスト教徒への迫害を概略したものである。それぞれが短い 11 の章から成り、以下のような構成と内容となっている。なお、ディケンズの時代は、後に「キング・ジェームズ・バージョン(King James Version: 1884 年)」と呼ばれるようになる「欽定英訳聖書 (The Authorized Version of Bible : 1611)」が読まれていたが、ここでは日本聖書協会編『新共同訳』の小見出しを聖書の内容を表す言葉として用い、ディケンズが採用した箇所が一つの福音書にだけ記されている場合はその福音書名を、また同じエピソードで複数の福音書に記されている並行箇所は、その中でも内容的に近いと思われる福音書名を濃い活字のボールド体で表記する。並行箇所の記述を繋ぎ合わせたり、並行箇所自体の内容が同じものは、一つのエピソードについて複数ボールド体で示している。また、聖書の物語に挿入してディケンズ自身が解説を加えた部分を《》で囲む。

## 第一章

《子どもたちへの呼びかけ、イエス・キリストを知ることの重要性》□

イエス・キリストの誕生（マタイ 1:18-25、ルカ 2:1-7）

羊飼いと天使（ルカ 2:8-17）

占星術の学者たちが訪れる（マタイ 2:1-12）

エジプトに避難する（マタイ 2:13-23）

ヘロデ、子どもを皆殺しにする（マタイ 2:16）

## 第二章

エジプトから帰国する（マタイ 2:19-22）

ナザレに帰る（マタイ 2:23、ルカ 2:39）

神殿での少年イエス（ルカ 2:41-52）

洗礼者ヨハネ、教えを宣べる（マタイ 3:1-12、マルコ 1:1-8、ルカ 3:1-18、ヨハネ 1:19-28）

イエス、洗礼を受ける（マタイ 3:13-17、マルコ 1:9-11、ルカ 3:21-22）

多くの病人をいやす（マタイ 8:14-16、マルコ 1:29-34、ルカ 4:38-41）

カナの婚礼での奇蹟（ヨハネ 2:1-12）

## 第三章

十二人を選ぶ（マタイ 10:1-4、マルコ 3:13-19、ルカ 6:12-16）

《最も貧しくみすばらしい人が天国で輝く天使となること、そのような人に親切にするようにと説く。》□

四人の漁師を使徒にする（マタイ 4:18-22、マルコ 1:16-20、ルカ 5:1-11）

山上の説教の中の主の祈り（マタイ 5:1-2, 6:9-15、ルカ 11:1-5）、

重い皮膚病を患っている人をいやす（マタイ 9:1-3、マルコ 1:40-42、ルカ 5:12-13）

中風の人をいやす（マタイ 9:1-8、マルコ 2:1-12、ルカ 5:17-26）

百人隊長の僕をいやす（マタイ 8:5-13、ルカ 7:1-10）

指導者の娘を生き返らせる（マタイ 9:18-26、マルコ 5:21-43、ルカ 8:40-56）

《イエスが救世主と呼ばれる理由》

## 第四章

安息日に麦の穂を摘む・手の萎えた人をいやす（**マタイ 12:1-8,12:9-14**、マルコ 2:23-28, 3:1-6、ルカ 6:1-5, 6:6-11）

やもめの息子を生き返らせる（**ルカ 7:11-17**）

嵐を静める（**マタイ 8:23-27**、**マルコ 4:35-41**、ルカ 8:22-25）

悪霊に取りつかれた人をいやす（**マタイ 8:28-32**、**マルコ 5:1-13**、**ルカ 8:26-33**）

洗礼者ヨハネ、殺される（**マタイ 14:1-12**、**マルコ 6:14-29**）

## 第五章

罪深い女を赦す（**ルカ 7:36-50**）

《神の赦しを求めるのなら、人を許さねばならないという教えを説く。》

ベトザタの池で病人をいやす（**ヨハネ 5:1-18**）

五千人に食べ物を与える（**マタイ 14:13-21**、**マルコ 6:30-44**、**ルカ 9:10-17**、**ヨハネ 6:1-13**）

湖の上を歩く（**マタイ 14:22-33**、**マルコ 6:45-52**、**ヨハネ 6:15-21**）

四千人に食べ物を与える（**マタイ 15:32-38**、**マルコ 8:1-9**）

十二人を派遣する（**マタイ 10:1-8**、**マルコ 6:7-13**、**ルカ 9:1-6**）

イエス、死と復活を予告する（**マタイ 16:21**、**マルコ 8:31**、**ルカ 9:22**）

## 第六章

イエスの姿が変わる（**マタイ 17:1-6**、**マルコ 9:2-8**、**ルカ 9:28-36**）

悪霊に取りつかれた子をいやす（**マタイ 17:14-18**、**マルコ 9:14-29**、**ルカ 9:37-43**）

天の国でいちばん偉い者（**マタイ 18:1-6**、**マルコ 9:33-37**、**ルカ 9:46-48**）

「仲間を赦さない家来」のたとえ（**マタイ 18:21-35**）

「ぶどう園の労働者」のたとえ（**マタイ 19:30-20:16**）

わたしもあなたを罪に定めない（**ヨハネ 8:1-11**）

## 第七章

善いサマリア人（**ルカ 10:29-37**）

客と招待する者への教訓（**ルカ 14:7-11**）

「大宴会」のたとえ（**マタイ 22:1-14**、**ルカ 14:16-24**）

徴税人ザカイ（**ルカ 19:1-7**）と「放蕩息子」のたとえ（**ルカ 15:11-32**）を結びつける

金持ちとラザロ（**ルカ 16:19-31**）

皇帝への税金（**マタイ 22:15-22、マルコ 12:13-17、ルカ 20:20-26**）

やもめの献金（**マルコ 12:41-44、ルカ 21:1-4**）

## 第八章

ラザロの死・イエス～ラザロを生き返らせる（**ヨハネ：11:1-44**）

イエスを殺す計画（**マタイ 26:1-5、マルコ 14:1-2、ルカ 22:1-2、ヨハネ 11:45-57**）

ベタニアで香油を注がれる（**マタイ 26:6-9、マルコ 14:3-5、ヨハネ 12:1-6**）

エルサレムに迎えられる、商人を神殿から追い出す（**マタイ 21:1-17、マルコ 11:1-11,15-19、ルカ 19:28-48、ヨハネ 12:12-19**）

弟子の足を洗う（**ヨハネ 13:4-17**）

裏切りの予告（**マタイ 26:20-25、マルコ 14:17-21、ルカ 22:21-23、ヨハネ 13:21-30**）

ユダ裏切りを企てる（**マタイ 26:14-16、マルコ 14:10-11、ルカ 22:3-6**）

## 第九章

過越の食事を準備させる（**マタイ 26:17-20、マルコ 14:12-17、ルカ 22:7-14**）

主の晩餐（**マタイ 26:26-30、マルコ 14:22-26、ルカ 22:15-20**）

ペトロの離反を予告する（**マタイ 26:31-35、マルコ 14:27-31、ルカ 22:31-34、ヨハネ 13:36-38**）

ゲッセマネで祈る（**マタイ 26:36-46、マルコ 14:32-42、ルカ 22:39-46**）

裏切られ逮捕される（**マタイ 26:47-56、マルコ 14:43-50、ルカ 22:47-53、ヨハネ 18:1-11**）

## 第十章

ペトロ、イエスを知らないと言う（**マタイ 26:58,69-75、マルコ 14:54,66-72、ルカ 22:54-62、ヨハネ 18:15-18, 25-27**）

最高法院で裁判を受ける（前半：**ヨハネ 18:19-24**、後半：**マタイ 26:59-68、マルコ 14:55-65、ルカ 22:63-71、**）

ユダ、自殺する（**マタイ 27:3-8、使徒言行録 1:18-19**）

ピラトから尋問される、死刑の判決を受ける（**マタイ 27:1-2,11-31、マルコ 15:1-15、ルカ 23:1-25、ヨハネ 18:28-19:16**）

## 第十一章

十字架につけられる（**マタイ 27:32-44、マルコ 15:21-32、ルカ 23:26-43、ヨハネ 19:17-26**）

イエスの死（マタイ 27:45-56、マルコ 15:33-41、ルカ 23:44-49、ヨハネ 19:28-30）

イエスのわき腹を槍で突く（ヨハネ 19:31-34）

墓に葬られる（マタイ 27:57-61、マルコ 15:42-47、ルカ 23:50-56、ヨハネ 19:38-42）

番兵、墓を見張る（マタイ 27:62-66）

復活する（マタイ 28:1-10、マルコ 16:1-8、ルカ 24:1-12、ヨハネ 20:1-10）

イエス、マグダラのマリアに現れる（マルコ 16:9-11、ヨハネ 20:11-18）

番兵、報告する（マタイ 28:11-15）

エマオで現れる（マルコ 16:12-13、ルカ 24:13-31）

弟子たちに現れる（ルカ 24:33-43）

イエスとトマス（ヨハネ 21:24-29）

天に上げられる（マルコ 16:19、ルカ 24:50-53、使徒言行録 1:3-11）

弟子たちを派遣する（マタイ 28:16-20、マルコ 16:15、ルカ 24:47-48、ヨハネ 20:21、使徒言行録 1:8）

マティアの選出（使徒言行録 1:12-26）

ペトロの投獄と釈放（使徒言行録 4:3, 21）

アナニアとサフィラ（使徒言行録 5:1-11）

使徒たちに対する迫害（使徒言行録 5:17-42）

ステファノの殉教（使徒言行録 7:54-60, 8:1）

サウロの回心（使徒言行録 9:1-19）

サウロ、福音を告げ知らせる（使徒言行録 9:20-31）

クリスチャンの名の由来、迫害の歴史、世界宗教となる

《子どもたちにキリスト教とは何かを教える。》

以上のように、第1章・2章ではイエスの誕生から公生涯に至るまでを辿り、第3章から5章にかけては奇蹟の物語を中心に、そして第6章・7章では主にたとえ話を引用してイエスの言葉と行いを綴っている。第8章からはイエスの十字架に向かう経緯が語られて、最終章での死と復活の場面へと繋がっていく。このように明快なストーリー展開には、

聖書に描かれたイエス像を子どもに理解しやすく、興味を惹きつけるための工夫があり、短期間で書かれたものではなく、時間をかけて練り上げられたことが推測される。<sup>2</sup>

また、ピーター・アクロイド(Peter Ackroyd)が「子ども向けの物語や妖精物語で用いるシンプルな言葉」<sup>3</sup>と述べているように、幼い子どもたちに読み聞かせるための草稿であったことから、平易な言葉で語りかける口調の文体となっている。ディケンズの小説に多く見られる、想像力の赴くままに細部に分け入って五感に訴える長々とした情景描写や誇張によって引き立たせる戯画化された人物描写はなく、できるだけ聖書の物語を忠実に伝えようとする配慮が窺える。

## 2. エピソードの選択

『主イエスの生涯』は、これまで「ルカによる福音書」を基にして他の福音書のエピソードが加えられたという解説が多くなされてきた。<sup>4</sup>しかし、以上のように聖書と詳細に照合してみると、マタイから40箇所、ルカから34箇所、マルコから21箇所、ヨハネから20箇所、そして作者がルカとされている「使徒言行録」から9箇所のエピソードを採用しており、「マタイによる福音書」による記事が最も多く使われていることがわかる。これは四つの福音書の中で最も倫理的な面が強く、後述するようにこの物語で一貫してキリスト教の実践倫理が強調されていることに通じている。

このように、子ども向けの聖書を編纂するに当たって、どのエピソードを採用するか、また並行箇所が多い四福音書の中でどの福音書の記述に依るかについて、ディケンズ自身の聖書理解に基づいた選択がなされているのは明らかであり、彼の信仰のあり方を示唆する資料として重要な意味を持つと思われる。

では、『主イエスの生涯』において聖書の中のどの要素が省略され、またどのようなエピソードが採用されているのだろうか。取捨選択の基準からその特徴を考えてみたい。

## Ⅱ. 『主イエスの生涯』の特徴

### 1. 人間イエスの強調

第一の特徴として挙げられるのは、イエスの誕生に先立つ出来事である聖霊による受胎告知（マタイ 1:18-25, ルカ 1:26-38）の場面が省略されていることである。これは、子ども向けに書かれているため、説明が難しい場面を省いたという解釈がなされる一方で、ディケンズがイエスの神性を否定している証拠として取り上げられるところでもある。

また、イエスの誕生・羊飼いと天使の場面については「ルカによる福音書 2:1-13」に依っているが、その中の羊飼いに向けた天使のお告げとして語られる「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである（ルカ 2:11）」という言葉は次のように置き換えられている。「その幼児は大きくおなりになると、大層立派なお方となられ、神様は自分の獨り子としてお愛しになります。そしてそのお方は人々に、互いに愛し合わねばならないことや、争ったり、傷つけ合ったりしてはいけないことを、お教へくださいます」（岩崎訳 3）という部分である。この表現は、イエスが生まれながらに神の子であることを必ずしも否定するものではないとしても、立派な行いをなすがゆえに神に愛され、人々の師となるという人間イエスの強調がなされているのは確かである。<sup>5</sup>

### 2. 聖霊の不在

次に『主イエスの生涯』において特徴的な点として、聖霊(Holy Spirit)、神の霊(Spirit of God)という言葉が一度も使われていないことが



挙げられる。<sup>6</sup> 受胎告知の場面が省略されたのと同様、イエスの「聖霊を与える約束」の言葉（ヨハネ 14:15-31）は採用されず、復活したイエスの「聖霊の約束」（使徒言行録 1:3-5）とペンテコステの出来事である「聖霊が降る」（使徒言行録 2:1-4）という記事についても触れられてはいない。また、「イエス洗礼を受ける（マタイ 3:13-17, マルコ 1:9-10, ルカ 3:21-22）」場面では、「イエスは、神の霊が鳩のようにご自分の上に降って来るのを御覧にになった。（マタイ 3:16, The Authorized Version of Bible: “he saw the Spirit of God descending like a dove,”）」という聖書の記述が、「大空がパツト開け、鳩のような美しい小鳥が一つ舞い下がって来て、（原文：“a beautiful bird like a dove came flying down,”23）」（岩崎訳 12）と変えられている。<sup>7</sup>

1842年のアメリカ旅行で出会った牧師に影響を受け、その後ディケンズは一時期ロンドンのユニテリアン派の教会に通っていたことはよく知られており、そのすぐ後に『主イエスの生涯』が書かれていることから、ディケンズが三位一体の教義を否定するユニテリアン派の立場から聖書を編纂したとする見方もなされてきた。<sup>8</sup> ほぼ同時代の子ども向けに出版された聖書<sup>9</sup>の中でも、受胎告知とペンテコステの記述がなされていないものもあることを考えると、その事だけを取り上げてディケンズの信奉する教派を論じることは早計であるように思われる。しかし、エピソードの選択の過程で聖霊に関する部分を省いたことに、少なくともそれが子どもに伝えるべき重要なことではないという判断があったことは否めない。

### 3. 愛と赦しのイエスの強調

次に『主イエスの生涯』の中で取り上げられていない聖書の記述の一つとして、神の怒りと裁きを宣べるイエスや激しく怒るイエスの記事が挙げられる。「もし片方の手か足があなたをつまづかせるなら、それを切って捨ててしまいなさい（マタイ 18:6-9, マルコ 9:42-48）」という

イエスの言葉、「いちじくの木を呪う（マタイ:21:18-19、マルコ 11:12-14）」、「悔い改めなければ滅びる（ルカ：13:1-5）」などの場面である。<sup>10</sup>

このことと関連して、イエスの言葉にある旧約からの引用や福音書記者の旧約の成就についての語りの場面が描かれていない点に注目したい。言及されていない神の怒りと裁き、旧約に関する叙述という二つの要素を結び合わせると、ディケンズ特有の聖書観が見えてくるからである。それが小説の中で最も顕著に示されているのが、後期小説の『リトル・ドリット (*Little Dorrit*)』の中で、主人公エイミー・ドリット (*Amy Dorrit*) がクレナム夫人 (*Mrs. Clenamn*) に説く次の場面である。

「怒りや懲罰では、わたしたちの慰めにも導きにもなりませんわ。私は生れてからこの惨めな監獄に育ち、ろくな教育も受けてはおりませんが、でも、それよりもっと新しい、もっとよい時代があったのではないのでしょうか。病める者を治し、死人をよみがえらせ、苦しむ者・孤独な者の友となり、人間の罪に憐みの涙を流して下さる忍耐強い主だけを、私たちの導きにしてください。他のことを全部取り除けて、主だけを思い出していれば、私たちは正しいことしかできないはずですわ。主のご生涯には復讐や傷めつけは絶対にありません。主のみ跡を追って、他に目もくれなければ、絶対に道をあやまることなんかありません。」<sup>11</sup>

これは、怒りと懲罰という神の一面だけに固執し、神の愛と赦しを認めようとしない、おおよそキリスト教信仰とはかけ離れた自己欺瞞に生きるクレナム夫人に対して発せられる言葉ではあるが、ここにはディケンズ自身の聖書理解が表されていると考えられるだろう。それは、旧約の時代に書かれた聖書には怒りや懲罰の神が示され、「もっと新しい、もっとよい時代」の新約聖書にこそ憐れみと赦しの神が示されているというものである。

このようなキリスト教観はディケンズの他の作品の中でも貫かれ、それを裏付けるように、彼の遺言や私的な書簡に記されている。たとえば、晩年に書かれた遺言には、「私の魂を、われらの主であり救世主であるイエス・キリストを通じて神のご慈悲に委ね、子どもたちには、新約聖書の広い精神における教えによって身を処するよう謙虚に努め、誰のものにせよ、その個々の字句の狭い解釈は、誰のものであっても信頼せぬよう勧める」<sup>12</sup>と書き記されている。また六男ヘンリー(Henry Dickens)への手紙では、「人間の根拠のない解釈や作り事に関わることなく、新約聖書を重んじ、」<sup>13</sup>さらに、オーストラリアに出発する七男エドワード(Edward Dickens)への手紙では、「人間による解釈や作り事には煩わされずに、この本(新約聖書)によって指示を受けるようにと願ったものだ」<sup>14</sup>と書いている。

ディケンズのこのような新約聖書重視の態度や新約聖書に愛と赦しのイエスを強調する解釈は、『主イエスの生涯』執筆の頃から既に定まっていたと考えることができるだろう。

#### 4. 善い行いと隣人愛

それでは、聖書の中のどの部分が『主イエスの生涯』で多く採用されているのだろうか。

まず、10箇所のとえ話の中で、最も長く引用されているのが「放蕩息子」で、2番目に長いのが「善いサマリア人」である。この二つのとえ話は、神への立ち還りと神の赦し、隣人愛を説いたものであり、「神を愛し、隣人を自分のように愛する」(マタイ 22:37-40、マルコ 12:29-31、ルカ 10:26-29)というイエスの語る「最も重要な掟」が『主イエスの生涯』の中心主題であることがわかる。

子どもたちへの語りかけの部分でも、「どんなに貧しい男の人にでも、女の人にでも、子供にでも、決して偉さうにしたり、不親切にははいけないよ」(岩橋訳 16)という言葉で謙遜を説き、「我々が神様に赦

して戴かうと思うならば、我々も亦その人を赦してあげなければならない」（岩橋訳 34-5）と、赦しについて述べている。そして、草稿の最後に子どもたちへの教えのまとめとして、「善いことをせよと教へるのがキリスト教で、」「自分を愛するのと同じやうに隣人を愛し、」「それに優しく慈悲深くして、誰をでも赦してあげること、そしてそれを少しも自慢しないで、自分の胸の中にそつと祕しておくこと、また神様を愛したり、神様にお祈りしたりすることを自慢しないで、何をするにもへりくだつて、正しい道を歩まうと努め勵み、いつも我々が神様を愛してゐることを、自分の行ひによつて人々に示さねばならないのだ」（岩橋訳 109-110）と述べて、隣人愛、赦し、へりくだり、神への愛、正しい行いを勧めている。さらに、「主イエス・キリスト様の御生涯と御教訓とをよく覚え、それに倣ふやうに骨を折れば、神様は我々の罪や過失をお赦し下され、我々は楽しい一生を送つて、平安に死ぬことが出来ると思つてよいのだよ」（岩橋訳 110）という結びの部分では、キリストに倣う生き方を説いている。

特に、「善いことをせよと教へるのがキリスト教で」の部分に注目すると、英文では“Remember! It is Christianity TO DO GOOD always—even to those who do evil to us.”(124) となっていて、大文字で印刷されている TO DO GOOD が手書き原稿では二重の下線が引かれている。この強調はディケンズにおけるキリスト教の重要なキーワードであることを示しており、「私たちに悪を働く者に対しても、常に善を行う」という実践倫理が彼の信仰の中心になっていたことが窺える。

## 5. 死者のよみがえり

次に、2つの章にわたって語られる多くの奇蹟の物語についても、取り上げ方に特徴が見られる。それは、「ラザロの死とイエス—ラザロを生き返らせる」物語が最も長く引用され、他にも「ヤイロの娘」「指導者の娘」「やもめの息子」を生き返らせるという「死者のよみがえり」

の物語がすべて収録されている点である。アンドリュー・サンダース (Andrew Sanders) は、ディケンズが小説において死の場面を多く描いたのは、それによって読者の悲しみを和らげ、慰めを与えることを意図していたと述べ、彼を復活信仰者 (Resurrectionist) と呼んでいるが、<sup>15</sup> 『主イエスの生涯』において死とよみがえりの物語に重点を置いて取り上げていることから、それが窺えるだろう。

また、この場面でも聖書とは異なったイエスの記述が見られることに注意したい。聖書では、「イエスは彼女 (マリア) が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して言われた。(The Authorized Version of Bible: “ he groaned in the spirit, and was troubled,”) 『どこに葬ったのか。』 (ヨハネ 11:33-34) 」となっているが、『主イエスの生涯』では、「マリヤが御足許に跪いて泣くと、みんなも同じようにして泣き出したのだつた。イエス様はみんなの悲しみを、心から気の毒に思召され、ご自分も涙をこぼしながら、(原文: “Jesus was so full of compassion for their sorrow, that He wept too,”<sup>82</sup>) 『ラザロをどこへ葬りましたか』とお尋ねになったのさ」(岩崎訳 69) と変えられているのである。聖書では、それに続くヨハネ 11:35 に“Jesus wept.”という記述はあるが、それは遺された者に対する憐れみとしては描かれていない。

ディケンズ自身が義理の妹メアリー (Mary Hogarth) の突然の夭逝を生涯悼み続けたことはよく知られているが、愛する者を失う悲しみに対するイエスの憐れみと死者のよみがえりの奇蹟に彼が深い慰めを得ていたことは想像に難くない。「心に憤りを覚え、興奮」したイエスではなく、共に泣く憐れみのイエス像に深化して、その場面に置き換えた背景には、そのような作者の心の投影があったと考えられる。先に述べたように激しく憤るイエスの姿は、ディケンズの解釈によって、ここでも柔和で慈愛に満ちたイエスが強調されているのである。

おわりに

ディケンズは『主イエスの生涯』執筆の翌年 1847 年に、イズリントンのカトリック使徒教会のレイトン牧師への返信で、「私の信条はイエス・キリストの信条である、と確信しています。そして、私が崇拜と尊敬の念を持つのは彼の生涯と教えです」<sup>16</sup>と書き記し、ディケンズにとってイエスの生涯に倣うことが信仰のあり方であることを示した。また 1856 年には、小作品への賛辞を寄せた一人の読者に宛てて、「私以上に新約聖書に対して敬虔な崇拜の念を抱き、その自足性を深く信じる者は多くはいないと思います」<sup>17</sup>と述べ、彼の信仰の基盤は新約聖書にあることを表明している。<sup>18</sup>『主イエスの生涯』は、子どもたちのために書いた私的な草稿というだけでなく、これらの書簡で言い表したディケンズの信条が込められたものであり、いわば彼の信仰告白として証した神聖な書物であったに違いない。

ディケンズの六男ヘンリーは、「父は『主イエスの生涯』が文学作品に優る、あるいはそれとは対照的なものとして厳粛に区別をしていた」<sup>19</sup>と回想している。また、『主イエスの生涯』の序文で、ヘンリーの妻マリー・ディケンズ(Marie Dickens)は、「神聖な主題であることは別に、この草稿は小説家にとって特別に私的なものであります。またそれは、彼の考えを表明したものではなく、彼のこころや人間性のあかしであり、同時に、もちろんのことですが、我らの主に対する彼の深い信仰のあかしでした」<sup>20</sup>と述べている。これらの家族の言葉は、ディケンズにとってこの書物が通俗的な他の作品とは一線を画すものであったことを証言するものであり、そのために公にはしないという決意があったと考えられる。

しかし、先に述べたように、この草稿は子どもが理解しやすいように編纂されたものとは言え、国教会や他のプロテスタントの正統派の解釈から外れたものと言わざるを得ない。ディケンズ自身がそのことに気付

いており、また聖書が神の言葉として神聖なものと考えがゆえに、個人の解釈によって編纂された聖書を世に出してはならないという判断もあったのではないだろうか。

ディケンズ作品の中であまり重要視されることがない『主イエスの生涯』は、内容と共に、その扱い方にも作者のキリスト教観が表されているように思われる。それは、彼のこのような二重の意味での聖書に対する敬虔さであり、教派や教義に囚われない、新約聖書の中でも特に福音書を中心に置いた信仰のあり方である。この草稿の執筆当時、彼が国教会内部で起きていた教理論争や国教会の社会活動に対する批判から宗教的懐疑に陥っていたことは知られている。<sup>21</sup> そのような時に一時期国教会を離れ、自らの信仰の基盤を、改めて聖書に求めて私的に記されたのが『主イエスの生涯』と考えられるのである。

## 注

\* 本稿は、2010年度日本キリスト教文学会関西支部夏季大会（7月31日 於大阪学院大学）での「ディケンズ文学の原点として『主イエスの生涯』を読む」と題する口頭発表に修正を加えたものである。

\* 『主イエスの生涯』の英文は、Charles Dickens, *The Life of Our lord: Written Expressly for his Children by Charles Dickens*, The Westminster Press, 1981.

(Reprint of the 1934 ed. Published by Associated Newspapers, London) を用い、引用の後にページ数を記す。

\* 『主イエスの生涯』は、イギリス・アメリカで新聞掲載された後、各国が著作権を取得して1934年に出版されることになる。本稿では、その年の11月に早くも日本で邦訳された岩橋武夫訳『ディケンズ 主イエス様の御生涯』（三省堂、1934）から引用し、後にページ数を記す。

1. Kathleen Tillotson ed. *The Pilgrim Edition: The Letters of Charles Dickens, Vol.4 (1844-46)*, Clarendon Press, 1977. p.573. の脚注では、ディケンズの晩年、Georgina が私的に印刷してよいかどうかを尋ねたところ、ディケンズは1～2週間考えて許可しなかったという。
2. 短期間に書かれたという説があるが、N.C.Peyrouton が指摘するように、1846年から49年の4年間をかけて完成されたと考えるのが妥当と思われる。  
“*The Life of Our Lord, Some Notes of Explication*” *The Dickensian, Vol.LIX, Part II, No.340*, 1963, p.104.
3. Peter Ackroyd, *Dickens*, 1990, Minerva, p.530.
4. Janet L. Larson, *Dickens and the Broken Scripture*, The University of Georgia Press, p.10. など。
5. 19世紀前半のヨーロッパ大陸では聖書の歴史批評が盛んとなり、ヘーゲル哲学から影響を受けたドイツのディヴィッド・F.シュトラウスが1835年～36年に『イエスの生涯』を著した。イギリスの女流作家ジョージ・エリオットが1846年にそれを英訳している。この英訳がディケンズの『主イエスの生涯』の執筆開始の年に出版されていることから、聖書解釈を巡る新しい流れが起きた時代背景との関連で、『主イエスの生涯』を位置づけることが重要であるが、それについては稿を改めたい。
6. 第4章で“an evil spirit”という言葉は使われている。
7. この部分は岡田尚訳『ディケンズ 救い主イエスさまのご一生』（新教出版社、1981年）において、本文では聖書通りに訳され、注でディケンズの原文が紹介されている。
8. 例えば、Edgar Johnson, *Charles Dickens, His Tragedy and Triumph, Vol.2* p.1 の脚注の中で、「文学的に重要な作品ではないが、ユニテリアンの主張が首尾一貫していることは意義深い」と述べている。
9. 当時の子ども向けの聖書のうち主なものとして以下の3つを挙げることができる。一つは、ヘンリー・ウェアの『救い主の生涯(Henry Ware, *The Life of the Saviour*, 1833)』である。これは、教会の日曜学校で使われたもので、脚注の部分



に福音書からの引用箇所を示しながらイエスの生涯を綴り、ユダヤの歴史について多く語られている。二つ目は、匿名の女性作家による『聖書物語：我らの救い主の生涯の出来事を子どもに分かり易く表す試み(anonymous female author, *Gospel Stories; An Attempt to Render Events of the Life of Our Saviour Intelligible to Children*, 1833)』で、タイトルの通り、福音書の一つの物語をセクション毎に紹介し、それぞれにキリスト者の心得や教会生活の覚書などが加えられた子どもの宗教教育の教材となっている。また、ルーシー・バートンの『私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの福音書物語(Lucy Barton, *The Gospel History of Our Lord and Savior Jesus Christ*, 1837)』では、旧約聖書の引用が多く、旧約の成就としての新約聖書の位置づけがなされており、聖書解釈とキリスト者への勧告が中心となっている。これらの中で、バートンの著作には受胎告知の場面と「処女マリア」という言葉が記されているが、他の2冊には処女受胎については書かれていない。また、バートンは「聖霊の約束」について触れているが、他の2冊はイエスの昇天で物語を閉じ、聖霊降臨については述べられていない。

- 1 0. 他にも、「あなたたちのことは知らない」(マタイ：7:21-23)、「平和ではなく剣を」(マタイ 10:34-39)、「毒麦の譬え」(マタイ 13:24-30)、「悔い改めない町を叱る」(ルカ 10:13-16)、「愚かな金持ちの話」(ルカ 12:13-21)、「実のならないいちじくの木」の譬え」(ルカ：13:6-9)、「狭い戸口」(ルカ：13:22-30)、「ぶどう園と農夫の譬え」(マタイ 21:33-46、マルコ 12:1-12、ルカ：20:9-19)などのエピソードには触れられていない。
- 1 1. Charles Dickens, *Little Dorrit*, Oxford, p.792. 日本語訳は小池滋訳『リトル・ドリット』ちくま文庫、p.262 を用いた。
- 1 2. John Forster, *The Life of Charles Dickens, Vol. I*, Appendix, Everyman's Library, 1969, p.422.
- 1 3. *The Dickensian*, Vol.XV. No.4, 1919, p.175.
- 1 4. Forster, Vol. 2, pp.379-80.
- 1 5. Andrew Sanders, *Charles Dickens: Resurrectionist*, Macmillan,1982, p.21.

16. *Pilgrim Letters Vol. 5: p.45, to Reverend F.W.H. Layton, 25 March 1847.*
17. チェルシーのオールド・チャーチ、R. D. ディヴィーズ牧師が「ゴールデン・メアリー号の難破」というクリスマス物語の讃美歌に感動して送った手紙への返信：1856年（‘A Child’s Hymn in “The Wreck of the Golden Mary”’ *The Dickensian, Vol. XII, No.5, 1916, p.129.*）
18. フィリップ・コリンズはディケンズについて、「新約聖書キリスト教徒 (New Testament Christian)」、あるいは、「福音書キリスト教徒(Gospel Christian)」と言っている。（Philip Collins, *Dickens and Education, Macmillan, 1964, p.54.*）
19. Sir Henry Fielding, *The Recollections of Sir Henry Dickens, K. C, Heinemann, 1934, p.29.*
20. Marie Dickens, “Foreword to *The Life of Our Lord,*” p.7.
21. 拙稿「ディケンズ作品における罪と救いー変わったものと変わらなかったもの」（『キリスト教文学研究』第25号、2008年）pp.101-113において、詳しく述べた。

出典 『キリスト教文藝』第二十七輯、日本キリスト教文学会関西支部、平成23年6月、pp.1-17.